

認知症患者へのパーソン・センタード・ケアの近年の取り組みに関する

文献検討

Literature Review of Recent Person-Centered Care Initiatives for Patients with Dementia

高野佳範¹⁾ 青木久恵¹⁾

1)福岡看護大学 看護学部 看護学科 基礎・基礎看護部門

抄 録

本研究の目的は、文献検討を通して認知症患者へのパーソン・センタード・ケア (Person Centered Care:以下 PCC) に関する近年の取り組みについて検討することである。医学中央雑誌にて「認知症患者」and「パーソン・センタード・ケア」をKeywordとして検索し、本研究の目的に合う21件を分析対象とした。分析は、認知症患者へのPCCに関する取り組みについて、内容の類似性からカテゴリー化を行った。その結果、【PCC実施者を対象とした研修効果の検証】【PCC介入プログラムの効果の検証】

【PCCの実践能力に関する評価】【PCC実践者の意識と看護実践に関連する要因の分析】の4カテゴリー、9サブカテゴリーに分類された。PCCの近年の取り組みは多岐に渡っていたが、今後入院の増加が見込まれる急性期病院におけるPCCを基盤とした看護実践についての取り組みは見当たらなかった。今後、教育プログラムの開発や研修などを通して、医療・介護が連携し認知症に関する専門知識を積み重ね、認知症患者へのPCCに取り組んでいく必要がある。

キーワード：認知症，高齢者看護，パーソン・センタード・ケア，ディメンティア・ケア・マッピング

緒 言

我が国では、高齢化率の増加に伴い、身体疾患の治療で入院が必要な認知症高齢者が増加し、急性期病棟では認知症高齢者への看護提供頻度が61.7%と最も高い¹⁾。

認知症高齢者看護には、2000年の介護保険法施行に伴い、すべての人々に価値があることを認め、個別性や人間関係の重要性を強調したパーソン・センタード・ケア (Person Centered Care:以下 PCC) の理念が導入されるようになった。

PCCは、1980年代にTom Kitwoodが提唱し、英国のNational Health Serviceによって取り入れられ、2009年「認知症とともに良き生活 (人生) を送る：認知症国家戦略」で病院における認

知症ケアの質向上に向けて取り組まれているが、日英の比較では、日本の急性期病院の看護師や管理者の看護実践は、英国のレベルに及んでいないことが示唆されている²⁾。

急性期病院勤務の看護師は、認知症に対する知識や経験不足を自覚しており、その上、身体疾患への治療が優先せざるを得ない状況下で、認知症高齢者の意思や尊厳を重視したケアを実施することに限界が生じ^{3),4)}、様々な困難感を抱えていることが報告されている⁵⁾。また認知症専門病棟の看護師であっても、認知症の症状に関連する困難⁶⁾、患者との関わりに関連する困難などの認知症看護に特有の困難があることが明らかとされており、認知症への理解や看護方法の模索、看護体制

の充実などを検討する必要性が指摘されている⁷⁾。

そこで本研究では、近年、認知症高齢者へのPCCに関して、どのような取り組みがあるのかを明らかにすることを目的とする。

研究方法

1. 対象論文の抽出方法

医学中央雑誌WEB版を使用して、「原著論文」「最新5年分」の条件下で、Keywordは、「認知症患者」and「パーソン・センタード・ケア」で検索を行った。その結果、33件が抽出された。このうち、症例報告や学術集会・論文集は除外し、本研究の目的に沿う21件を分析対象とした。

2. 分析方法

1) 認知症患者へのPCCに関する取り組み

21件の文献について、PCCに関する取り組みを抽出し、内容の類似性からカテゴリー化を行った結果、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを<>で示す。また、PCCに関する分析内容を表1に示す。

2) 倫理的配慮

倫理的配慮として、文献の出典を明記し、内容は著者の意図を侵害しないように留意した。

結 果

1. 研究デザインの分類

研究デザインの分類は、量的研究10件、質的研究2件、準実験的研究7件、混合研究1件、縦断的介入研究1件であった。

対象施設は、介護施設が8件、急性期病院が8件、地域包括ケア病棟や施設が不明なものであった。なお、急性期病院を対象にした研究には地域包括ケア病棟や施設が不明なものを対象としたものであった。

2. PCCに関する取り組み

PCCに関する取り組みについてカテゴリー化を行った結果、4カテゴリー、9サブカテゴリーに分類された。

1) PCC実施者を対象とした研修効果の検証

鈴木らは急性期病院の看護師を対象に、夜間せ

ん妄を発症した認知症模擬患者 (Simulated Patient; 以下 SP) によるセッションを実施した⁸⁾ 結果、PCC やせん妄に関する理解を深める効果について報告している。さらに、看護師・介護支援専門員などの多職種を対象に、認知症高齢者に対する通常の看護実践とパーソン・センタード・ケアの考えに基づいた看護実践の違いを通して自身の体験を振り返るための視聴覚教材

(DVD) を用い、PCC の理念、PCC の要素である VIPS (V: 価値, I: 独自性, P: 認知症の人の視点, S: 社会的心理) について解説した認知症看護教育プログラムを実施した。その結果、実践に関する学び及び認知症患者への工夫された具体的なケアに関する学びの効果があつたことを報告している⁹⁾。また鈴木らは、WEB による e-learning にて認知症高齢者への理解やせん妄防止などの解説及び事例動画による週 1 回、計 4 週間にわたる「認知症看護実践能力育成プログラム」の実施した結果、PCC に関する意識、倫理的感受性などが、受講前と比較して 3 カ月、6 カ月後と継続して向上したことを報告している¹²⁾。

これらは、教育研修プログラムによる PCC 看護実践能力への効果検証に関する取り組みであったため、サブカテゴリー名を<教育研修プログラムによる PCC 看護実践能力への効果検証>とした。

土肥らは急性期病院に勤務する看護師を対象に「認知症高齢者の視点を重視した認知症患者への対応」教育プログラムを実施した結果、認知症の症状に対する看護師の対処困難感は、対照群に比して「興奮・多動行動に対する対処困難感」が有意に減少したことを報告している¹⁰⁾。また内藤らは、ケアスタッフ主体で PCC を踏まえた転倒予防に取り入れた結果、「業務優先でなく、認知症高齢者の個別性に合わせたケアの転換が必要」「多職種で協力した転倒予防ケアを作り出し継続したい」などの個別性の尊重や多職種協調・協働などの意識の変化について報告している¹¹⁾。これらは、教育研修プログラムによる PCC 実施者の意識変化の分析に関する研究であったため、サブカテゴリー名は<教育研修プログラムによる PCC 実施者の意識変化の分析>とした。

これらのサブカテゴリー<教育研修プログラム

表1 パーソン・センタード・ケアに関する取り組み

カテゴリー	サブカテゴリー	取り組み	対象	著者/掲載年
PCC実施者を対象とした研修効果の検証	教育研修プログラムによるPCC看護実践能力への効果検証	認知症模擬患者（SP）を用いた研修プログラムを開発し、その効果を明らかにする	急性期病院 看護師18名	鈴木ら/2017
		PCCを基盤としたe-learningによるプログラムの有効性を検証する	急性期病院 看護師71名	鈴木ら/2022
	教育研修プログラムによるPCC実施者の意識変化の分析	PCCを目指したリフレクション効果を得るため、視聴覚教材を用いた教育プログラムを開発し、その効果を明らかにする	研修受講生 多職種67名	鈴木ら/2017
		「高齢者の視点を重視した認知症患者への対応」に関する教育プログラムを実施し、認知症に関連した症状に対する看護師の対処困難感が減少するか評価する	急性期病院 看護師229名	土肥ら/2019
PCC介入プログラムの効果の検証	非薬物療法によるリハビリプログラム効果の検証	PCCを基盤とした転倒予防プログラムによるケアスタッフの意識変化について明らかにする	介護老人保健施設 ケアスタッフ6名	内藤ら/2021
		PCCの理念に基づいた集団プログラムCognitive Stimulation Therapyを参考に「いきいきリハビリ」を開発・実践し効果の検証を行う	介護老人保健施設 認知症高齢者23名	水野ら/2018
	日常生活支障ツールを使用した介入効果の検証	PCCの理念に基づいたタブレット版「いきいきリハビリ」を実施し、認知・心理面への影響を検証する	介護老人保健施設 認知症高齢者3名	黒野ら/2020
		PCCに基づいた認知症高齢者の生活支障ケアプランニングツールの有効性を明らかにする	介護老人保健施設 認知症高齢者26名 ケアスタッフ26名	鈴木ら/2019
PCCの実践能力に関する評価	転倒予防プログラムによる介入効果の検証	PCCを基盤とした「認知症高齢者の生活支障尺度を利用したケアプラン&実践ガイド」を用いてケアの有効性を明らかにする	高齢者施設 認知症高齢者14名	鈴木ら/2021
		PCC基盤とした視点から認知症高齢者の転倒の特徴を踏まえて開発した転倒予防プログラムの介入効果を明らかにする	介護老人保健施設 ケアスタッフ129名	鈴木ら/2019
	DCMによるPCCに基づいた看護実践に対する評価	DCMを実施・フィードバックし、ケアスタッフに与える影響とDCMを用いた認知症ケアの方向性を考察する	回復期病棟 看護師5名 介護士3名	安仁屋ら/2018
		1年間のDCMを実施し、PCCが及ぼす効果を量的・質的に調査し明らかにする	介護老人保健施設 ケアスタッフ 24名	鈴木ら/2021
PCC実践者の意識と看護実践に関連する要因の分析	DCM評価者の意識に関連する要因分析	PCCに基づいた看護実践自己効力感の尺度開発	急性期病院 看護師253名	鈴木ら/2019
		DCMを実施しているケアスタッフのPCCの意識と職場環境との関連性を明らかにする	有料老人ホーム ケアスタッフ232名	朴ら/2019
	PCCを目指した看護実践に関連する要因の分析	中小規模病院に勤務する看護職の認知症高齢者に対するPCCを目指した看護実践と看護実践の卓越性との関係を明らかにする	急性期病院 看護職222人	神谷ら/2021
		看護職が実践する身体拘束の実施状況とPCCにおける看護実践や看護実践能力などの関連要因を明らかにする	急性期病院 看護師879名	鈴木ら/2019
		PCCを目指した看護実践と看護職の基本属性および自律性などの関連要因を明らかにする	急性期病院 看護師248名	高野ら/2019
		PCCの尺度を使用し、せん妄知識高群・低群と看護実践を比較検討する	医療療養病床 看護師375名	曾根ら/2020
PCCを基盤とした看護実践と看護職の個人特性（基本属性や道徳的感受性、共感性等）、看護労働環境と看護実践の関連を明らかにする	PCCを基盤とした看護実践と看護職の個人特性（基本属性や道徳的感受性、共感性等）、看護労働環境と看護実践の関連を明らかにする	急性期病棟 看護師329名	前田ら/2021	
	PCCにおける認知症ケア実践と仕事に向き合う力および職務継続意向との関連を明らかにする	地域包括ケア病棟 看護職570名	小木曾ら/2020	

による PCC 実施者の意識変化の分析<>教育研修プログラムによる PCC 看護実践能力への効果検証<>については、PCC の実施者を対象とした研修プログラムの効果であるため、カテゴリー名を【PCC 実施者を対象とした研修効果の検証】とした。

2)PCC 介入プログラムの効果の検証

<非薬物療法によるリハビリプログラム効果の検証>では、水野らは認知症高齢者に対し、多様な認知刺激を組み合わせた個別リハビリテーショ

ンプログラムを実施した結果、認知機能への効果は認められなかったが、認知症患者の QOL を客観的に評価する QOL-D (Quality of life questionnaire for dementia:以下 QOL-D) では「陰性感情&陰性行動」,「落ち着きのなさ」の 2 項目に改善を認めている¹³⁾。

また黒野らは、タブレット端末を用いて写真や道具を使用しながら見当識の確認を行う訓練や聴覚記憶、判別能力、遂行機能などを活性化することを目的としたプログラムを実施した¹⁴⁾。その

結果、認知症高齢者の心理面において、介入前後で気分の変化やセッションの楽しさ、「場所の見当識」に改善が認められたことを報告した。

＜日常生活支障ツールを使用した介入効果の検証＞では、鈴木らは認知症高齢者の生活支障を解決するための生活支障ケアプランニングツールを活用し、ケアスタッフが生活支障に対してケアプラン立案して改善に取り組んでいた^{15)・18)}。その結果、認知症高齢者の生活支障から引き起こされる「焦燥や混乱に関係した生活支障」が有意に低下し、他者との人間関係のトラブルにおいて改善を報告した。

＜転倒予防プログラムによる介入効果の検証＞では、鈴木らはPCCを基盤とした認知症高齢者の転倒の特徴を踏まえた転倒予防プログラムを開発し、ケアスタッフに実施を促したところ、転倒予防に対するケアスタッフの意識や転倒件数の減少につながったことを報告した^{16)・17)}。しかし、その一方でコミュニケーションを図ることが難しい重度認知症高齢者に対しては介入効果が不十分である¹⁸⁾ことを指摘している。

これらの研究は、認知症高齢者へのPCC介入プログラムの効果に関する報告であるため、カテゴリ一名を【PCC介入プログラムの効果の検証】とした。

3)PCCの実践能力に関する評価

＜DCMによるPCCに基づいた看護実践に対する評価＞では、安仁屋らは回復期病棟の看護師・介護士が実践した認知症ケアの質について、認知症ケアマッピング (Dementia care mapping:以下DCM) による客観的評価を行った¹⁹⁾。DCMとは、認知症高齢者5名程度を施設の共有スペースで連続して観察し、5分毎に患者の表に現れている感情面と集中の度合いを数値で記録を行うものである。評価の結果、認知症高齢者を尊重した対応や、コンピテンシーに基づくケアを実践していたことを報告した。また鈴木らは、介護老人保健施設で3カ月に1回、年間計4回のDCMを実施した。その結果、評価を受けたケアスタッフは、PCCに対する自己効力感が高まったことを報告した²⁰⁾。

＜PCCに基づいた看護実践自己効力感の尺度開

発＞では、鈴木らは急性期病院の看護師を対象に認知症患者に対する看護実践の自信の程度を測定する尺度、看護実践自己効力感尺度を開発し、信頼性・妥当性を検証した上で、認知症ケア研修の効果の検証に応用できることについて報告していた²¹⁾。

これらの研究は、認知症高齢者へのPCCの実践能力の評価に関する報告であるため、カテゴリ一名を【PCCの実践能力に関する評価】とした。

4)PCC実践者の意識や看護実践に関連する要因の分析

＜DCM評価者の意識に関連する要因分析＞では、有料老人ホームにおける介護福祉士や看護師を対象としたPCCの理念に沿った認知症に関する意識や態度は、「上司によるサポート」、「能力の発揮・成長」と有意な正の関連を示し²⁶⁾ていた。

＜PCCを目指した看護実践に関連する要因の分析＞では、鈴木らは急性期病院の看護師を対象に調査を行った結果、「認知機能と本人に合わせた独自性のあるケア」「質の改善」「起こりうる問題を予測した社会心理的アプローチを含めたケア」の得点の高さは、認知症患者への身体拘束の実施を低める要因であると報告した²²⁾。さらに高野らは、PCCを目指した看護実践と看護師の自律性である「認知能力」「実践能力」²³⁾に関連があること指摘し、また、看護実践の質の高さを示す「看護実践の卓越性自己評価」における「患者の人格尊重と尊厳の遵守」²⁴⁾、及び道徳的感受性や看護労働環境²⁵⁾が有意な促進要因であることを報告している。また、せん妄に関する知識が高い者は、認知症高齢者に対して、よりPCCを意識した看護実践を行っていた²⁷⁾。小木曾ら²⁸⁾によると、職員間のコミュニケーション及び学び支え合う環境は互いに関与し、認知症ケアという仕事に向き合う力、ひいては職務継続意向につながると報告している。

これらの研究は、PCC実践者の意識及び看護実践に関連する要因の分析であるため、カテゴリ一名を【PCC実践者の意識と看護実践に関連する要因の分析】とした。

考 察

1. PCC に関する取り組み

1) PCC 実施者を対象とした研修効果の検証

PCC 実践者を対象に実施された研修の効果について、いずれの研究においても、認知症の症状の理解、及びPCCの理念に基づく実践の必要性・意欲などの認識の向上が示されていた。認知症患者へのケアは、対応する個人の能力に委ねられ、特に急性期病院の看護師にはPCCに基づいたケアは容易ではないことが指摘されていた²⁹⁾。近年の取り組みでは、PCC 実践者を対象とした研修が実施され、PCC に関する基本的な知識のみならず、SPやDVD教材による具体的な場面における対策の検討がなされた結果、実践の必要性・意欲の向上が示されていた。これらの成果は、個人のPCC実践能力の向上に留まらず、看護チーム内で共通した価値観や対応策を生み出す効果につながることで期待できるのではないかと考える。また、多職種を対象とした研修では、認知症患者の個別性に応じたケアへの転換の必要性やケアへの意欲の向上が認められていたが、多職種が相互に専門性を理解・尊重しながら連携し、業務優先ではなく、認知症高齢者の個別性を尊重した職場風土作りにもつながる効果が期待できるのではないかと考える。

2) PCC 介入プログラムの効果の検証

認知症高齢者を対象に、タブレット端末を用いた認知機能を刺激する¹⁴⁾ PCC 介入プログラムでは、PCC を基盤とした介入によって一部の認知機能とQOLの改善の効果を検証しており、PCC を基盤とした環境を整えることは、人権の尊重のみならず、認知症の回復にも影響を与える可能性を示唆している。しかし、身体合併症や自宅での介護困難などの理由により入院、または入所している認知症高齢者は、環境の変化やコミュニケーション障害によりせん妄や混乱を引き起こし、それが転倒につながるケースがある。このような中、PCC を基盤とした認知症患者の対応における教育プログラム¹⁰⁾ や転倒予防プログラム¹¹⁾ が認知症の行動・心理症状 (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia :BPSD) が高い群の転倒件

数が減少させ、介護老人保健施設では、個別の視点に合わせたケアを実施することで転倒につながる行動の緩和につながっている。また、認知症の症状である「焦燥」や「混乱」、感情や判断能力の低下に関連した人間関係に関するトラブル、コミュニケーションなどに関する生活支障^{15), 18)} は、介入前後で気分の改善が認められている。これらのことから、PCC に基づく認知症患者の視点を踏まえた介入プログラムの開発は、介入する個人の能力に委ねられず、望ましい看護実践の指標となり、統一したケアが実践される環境づくりにつながるのではないかと考える。

これらの研究は介護老人保健施設を対象としたものであり急性期病院ではできていないプログラムはできていなかった。

3) PCC の実践能力に関する評価

研修受講者のPCCに対する認識や意欲などの主観的評価のみならず、DCMなどの認知症患者の反応を踏まえた客観的評価もなされていた。DCMによる認知症ケアの客観的な質の評価では、必要なケアの明確化や実践したケアのリフレクションにつながっているため、認知症患者の視点に立ったケアの妥当性が評価され、改善につながることで期待できる。また、急性期病院における認知症患者看護に対する看護師の自信の程度を測定する自己効力感尺度は、目標を達成するための能力を自らがどれ程持っているかを認識する²¹⁾ 指標である。PCC を基盤とした認知症高齢者への看護を実践するためには、その必要性の理解に加え、一定の自己効力感が必要であるため、実践の有無や程度のみならず、自己効力感との関連に関する報告が待たれる。

4) PCC 実践者の意識や看護実践に関連する要因の分析

認知症患者へのPCC実践者意識と看護実践の関連要因として挙げられていたのは、認知症患者に関わる看護師の経験や、認知症やせん妄などに関する知識、職場環境である職員間のコミュニケーションの取り方であった。認知症患者への看護実践は、認知症の理解や知識・経験に基づき行われているが、個別性に応じた関わりに向けて、実践した看護に対する自分自身の振り返り²⁵⁾ の分析

を行うことは、より改善された PCC を実践していくために必要不可欠である。そのため看護師としての経験年数や認知症に関する知識の積み重ね、職員間におけるコミュニケーションを図りながら看護実践を遂行していくこと、看護を振り返るリフレクションを行うことで、その後の PCC 実践の質向上につながっていくのではないかと考える。

2. 認知症患者への PCC に関する課題

認知症患者への PCC に関する取り組みは、多岐に渡っていた。しかし、介護老人保健施設における取り組みが多く、身体疾患の加療が必要な認知症高齢者が入院する急性期病院を対象とした介入研究は見当たらなかった。急性期病院は、緊急・重症な状態にある患者の生命を守るための医療を主幹とし、高度で専門的な治療の提供を行っているが、多忙で緊急を要するケースが多く、認知症患者への PCC を基盤とした介入が困難であることが推察される。そのため今後、PCC に向けた具体的な介入の方向性について、研修や教育プログラム、看護実践などを通して医療・介護の双方および多職種との様々な検討を重ねていく必要があると考える。

結 語

1. 認知症患者への PCC の近年の取り組みは、【PCC 実施者を対象とした研修効果の検証】【PCC 介入プログラムの効果の検証】【PCC の実践能力に関する評価】【PCC 実践者の意識と看護実践に関連する要因の分析】の 4 カテゴリーに分類された。
2. 急性期病院などの医療施設を対象とした介入プログラムの開発やおよびその効果における有用性の検証の取り組みは見当たらなかった。今後、急性期病院において身体疾患への治療を優先せざるを得ない状況にある事が考えられる。
3. 今後、教育プログラムの開発や PCC 実践者への研修を基盤として、医療・介護が連携し認知症に関する専門知識を積み重ねていき、認知症患者への PCC に取り組んでいく必要がある。

本研究にて申告すべき利益相反事項はない。

引用文献

- 1) 厚生労働省：入院医療（その 6）．
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12404000HokenkyokuIryouka/0000105049.pdf>, (2022年6月30日)
- 2) 鈴木みずえ, Dawn Brooker, Jennifer Bray: パーソン・センタード・ケアをめざした看護実践自己評価尺度による看護実践の英国と日本の WEB 調査による比較. 日本老年医学会雑誌, 57(4), 484-488, 2020
- 3) 松尾香奈: 一般病棟において看護師が体験した認知症高齢者への対応の困難さ. 日本赤十字看護大学紀要, 25, 103-110, 2011
- 4) 天木伸子, 百瀬由美子, 松岡広子: 一般病院で入院治療する認知症高齢者への看護実践における認知症看護認定看護師の判断. 日本看護研究学会誌, 37(4), 63-71, 2014
- 5) 鈴木みずえ, 水野裕, グライナー智恵子 他: 重度認知症病棟における認知症ケアマッピングを用いたパーソン・センタード・ケアに関する介入の効果. 老年精神医学雑誌, 20(6), 668-680, 2009
- 6) 鈴木みずえ, 桑原弓枝, 吉村浩美 他: 急性期病院の看護師が感じる認知症に関連した症状の対処困難感と看護介入の関連. 日本早期認知症学会誌, 6(1), 52-57, 2013
- 7) 千田睦美, 水野敏子: 認知症高齢者を看護する看護師が感じる困難の分析. 岩手県立大学看護学部紀要, 16, 11-16, 2014
- 8) 鈴木みずえ, 阿部ゆみ子, 鈴木智子 他: 急性期病院へのパーソン・センタード・ケア導入を目指した看護師研修の教育効果-せん妄のある認知症模擬患者プログラム. 日本認知症ケア学会, 16(3), 631-641, 2017
- 9) 鈴木みずえ, 吉村浩美, 水野裕 他: パーソン・センタード・ケアをめざした認知症看護教育のプログラム効果-看護師に対する視聴覚教材 (DVD) を用いた研修のリフレクション-. 日本早期認知症学会, 10(1), 35-42, 2017

- 10) 土肥眞奈, 杉浦由美子, 杉本健太郎 他: 急性期病院を対象とした「高齢者の視点を重視した認知症患者への対応」教育プログラムの効果. 日本看護管理学会誌, 23(1), 11-18, 2019
- 11) 内藤智義, 鈴木みずえ, 阿部邦彦 他: 介護老人保健施設におけるパーソン・センタード・ケアを基盤とした認知症高齢者に対する転倒予防プログラムによるケアスタッフの多職種連携の意識変化〜フォーカス・グループ・インタビューを用いた分析〜. 日本転倒予防学会誌, 7(3), 39-47, 2021
- 12) 鈴木みずえ, 吉村浩美, 御室総一郎 他: 急性期病院の看護師に対する認知症高齢者実践能力育成プログラムの有効性. 日本老年医学学会雑誌, 59(1), 67-78, 2022
- 13) 水野純平, 斎藤千晶, 山下英美, 西浦裕子, 小長谷陽子: 小集団「いきいきリハビリ」の有効性の検証. 作業療法, 37(2), 161-167, 2018
- 14) 黒野隼, 斎藤千晶, 水野純平 他: タブレット版「いきいきリハビリ」の実施による認知症高齢者の心理面への影響. 日本認知症ケア学会, 19(3), 573-581, 2020
- 15) 鈴木みずえ, 服部英幸, 阿部邦彦, 中村裕子, 猿原孝行: 介護老人保健施設における認知症高齢者の生活支障ケアプランニングツールの有効性: パーソン・センタード・ケアを基盤としたケアの効果. 日本老年医学学会雑誌, 56(3), 312-322, 2019
- 16) 鈴木みずえ, 松井陽子, 大鷹悦子 他: パーソン・センタード・ケアを基盤とした認知症高齢者に対する転倒予防プログラムのケアスタッフに対する介入効果. 日本老年医学学会雑誌, 56(4), 487-497, 2019
- 17) 鈴木みずえ, 加藤真由美, 谷口好美 他: 介護老人保健施設ケアスタッフに対するパーソン・センタード・ケアに基づく転倒予防教育プログラム〜北陸地方における認知症高齢者の転倒予防効果の検証と認知症の行動心理症状 (BPSD) 高群に対する介入の検討〜. 日本転倒予防学会誌, 7(3), 27-38, 2021
- 18) 鈴木みずえ, 浅井八多美, 内山由美子 他: 介護老人保健施設におけるパーソン・センタード・ケアを基盤とした生活支障尺度を用いた実践ガイドの有効性. 日本早期認知症学会誌, 14(1), 18-26, 2021
- 19) 安仁屋優子, 稲垣絹代: 回復期リハビリテーション病棟における認知症ケアマッピング (DCM) を用いた認知症ケアの方向性. 名桜大学紀要, 23, 117-124, 2018
- 20) 鈴木みずえ, 浅井八多美, 内山由美子 他: 介護老人保健施設における1年間の認知症ケアマッピング (DCM) の有効性: 医療・福祉職の連携によるパーソン・センタード・ケアをめざした発展的評価が及ぼす効果. 日本老年医学学会雑誌, 58(1), 70-80, 2021
- 21) 鈴木みずえ, 吉村浩美, 長田久雄 他: 認知機能障害高齢者に対する看護実践上の自信の測定〜急性期病院の看護における自己効力感の測定尺度の開発〜. 日本早期認知症学会誌, 12(1), 52-59, 2019
- 22) 鈴木みずえ, 鈴木三恵子, 須永訓子 他: 急性期病院の看護師が実践する身体拘束の関連要因: 看護師の自己評価調査を用いた分析. 日本老年医学学会雑誌, 56(2), 146-155, 2019
- 23) 高野佳範, 藤野成美, 藤本祐二 他: 急性期病院で勤務する看護師の認知障害高齢者に対するパーソン・センタード・ケアを目指した看護実践とその関連要因. インターナショナル Nursing Care Research, 18(1), 1-9, 2019
- 24) 神谷美保, 鈴木みずえ: 中小規模病院に勤務する看護職の認知症高齢者に対する看護実践と看護実践の卓越性の関係. 日本早期認知症学会誌, 14(1), 46-54, 2021
- 25) 前田優貴乃, 勝野とわ子: 急性期病棟における認知障害高齢者に対するパーソン・センタード・ケアをめざした看護実践に関する要因. 老年看護学, 25(2), 71-79, 2021
- 26) 朴信江, 鈴木みずえ: 有料老人ホームに勤務するケアスタッフのパーソン・センタード・ケアの意識と職場環境との関連性. 日本認知症ケア学会誌, 17(4), 685-695, 2019

- 27) 曾根真璃苗, 鈴木みずえ: 医療療養病床における看護職のせん妄知識度合による看護実践の検討～せん妄知識高群と低群間での看護実践自己評価尺度 (SSNP-PCC) の比較～. 日本早期認知症学会誌, 13(2), 32-39, 2020
- 28) 小木曾加奈子, 伊藤康児: 地域包括ケア病棟の看護職における認知症ケア実践と仕事に向き合う力および職務継続意向との関連. 日本看護科学会誌, 40, 214-223, 2020
- 29) 神谷美保, 鈴木みずえ: 中小規模病院に勤務する看護職の認知症高齢者に対する看護実践と看護実践の卓越性の関係. 日本早期認知症学会誌, 14(1), 46-54, 2021
- 30) Bandura A. Self-efficacy: Tward a unifying theory of behavioral change. Psychol Rev, 84(2), 191-215, 1977

Literature Review on Recent Approaches to Person-Centered Care for Patients with Dementia

Yoshinori Kono¹⁾, Hisae Aoki¹⁾

1)Fukuoka Nursing College, Faculty of Nursing, Department of Nursing, Division of Basic Medical Sciences Fundamental Nursing

Key Words: Dementia, Elderly nursing, Person-centered care, Dementia care mapping

The purpose of this literature review was to investigate recent initiatives and issues related to Person-Centered Care (PCC) for patients with dementia. We searched the Journal of Health Care and Society using “dementia patients” and “person-centered care” as keywords, and analyzed 21 cases that fit the purpose of this study. As the method of analysis, we categorized initiatives related to PCC for dementia patients according to similarities in content. As a result, four categories and nine subcategories were identified: “Verification of the effects of training targeting PCC providers,” “Verification of the effects of PCC intervention programs,” “Evaluation of PCC provision capabilities,” and “Analysis of factors relating to awareness of PCC providers and the practice of nursing.” It was shown that diverse PCC initiatives were being practiced in recent years. However, we found no programs on the practice of nursing based on PCC, which is offered at acute-care hospitals and whose admissions are expected to increase from now on. Going forward, there is a need for medical and nursing care personnel to cooperate through developing educational programs and offering training in PCC, as well as accumulating professional knowledge on dementia from the perspective of PCC to improve care for patients.